

追 悼



故 三宅 和夫 先生

三宅和夫先生を偲んで

藤 原 史 郎

(筑波大学名誉教授)

筑波大学名誉教授三宅和夫先生が享年 88 歳で永眠されたのは 2009 年 5 月 10 日のことでした。先生は第二次世界大戦さなかの 1942 年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業、ただちに召集され、翌年には陸軍航空技術中尉、復員後は同物理学科助手、1961 年東京教育大学光学研究所教授、同大学の移転に伴って 1978 年筑波大学物理工学系教授を歴任された後、1984 年に定年退職されました。

先生の研究分野は応用光学、特に光学器械の理論と応用に集中され、おもなものに偏芯光学系の収差、計算機によるレンズの自動設計、光学薄膜、軟 X 線分光器の設計と試作、平面回折格子分光計の収差などが挙げられます。さらに、著書「幾何光学」、古典的な名著 M. Berek の「レンズ設計の原理」の翻訳書を上梓されました。

他方、1952 年には応用物理学会の分科会として、産官学の研究者・技術者を会員とする光学懇話会（後に日本光学会）が発足しました。先生はその創設に深くかかわり、以後「光学ニュース」（後に「光学」）の編集長、幹事長と

して会の発展に貢献されました。1950 年ごろ、光学会社はガラス表面の腐食、いわゆる「レンズのヤケ」に悩まされていました。光学懇話会では先生も一員であるレンズ表面研究委員会を組織し、いわば初めての産官学共同研究を行って問題を解決しました。また先生は 1974 年、1984 年に日本で開催された国際光学会議には役員として、また国際光学論文誌 *Optica Acta* の日本編集者として、国際的な光学の研究協力を遂行されました。

先生は後進の育成にもご熱心で、大学の門下生は言うに及ばず、光学工業研究組合（後に光学工業技術協会）に設けられたレンズ設計法研究委員会を主宰し、さらに例年組合が開催する講習会で長年にわたって幾何光学を講義するなど、企業の技術者の啓蒙にも尽力されました。

先生は研究・教育の傍ら、敬虔かつ熱心なクリスチャンとして幅広く活動されその生涯を終えられました。ご冥福を祈ります。